災害鍼灸について

市川治療室　No.327.2015.10

DMAT（ﾃﾞｨｰﾏｯﾄ）と呼ばれる医療ﾁｰﾑは、大規模災害や多傷病者が発生した事故現場でおおむね48時間以内に活動します。

ﾁｰﾑを構成しているのは災害時の活動において、機動性をもった専門的な訓練を受けた医師・看護師・事務調整員などです。

また、医師・看護師以外の多職種の医療職もﾁｰﾑ活動の構成員とされています。
多職種の一つとして鍼灸師も加えられています。

JIMTEF（ｼﾞﾑﾃﾌ）という組織は、国立病院機構・災害医療ｾﾝﾀｰの協力を得て大規模災害発生時に対応する技術・知識を習得するようにしています。

2011年の東北地方太平洋沖地震と津波の災害後、災害時に被災地の方々の役に立つためにとJIMTEF研修に参加する職種が多く現在は21団体が参加しています。

鍼灸師の団体である公益社団法人日本鍼灸師会の活動の一つに災害鍼灸があり
JIMTEFでの研修会に毎年参加しています（私も研修を受けました）

鍼灸師が活躍する時期は被災後約一週間が過ぎたあたりからで、対象者は避難所に避難している方々となります。

東北地方太平洋沖地震と津波災害後は、郡山市内の施設・ﾋﾞｯｸﾊﾟﾚｯﾄに避難していた富岡町の方々に介護予防運動と鍼灸を提供させていただきました。

先月、9月10日の大雨で茨城県内の鬼怒川の堤防が決壊し、常総市の中心街（市役所を含む）において水害などが起こりました。

DMATのﾘｰﾀﾞｰでJIMTEFで研修も担当されているﾄﾞｸﾀｰ・小早川氏から日本鍼灸師会に医療団体として参加要請を頂き私も参加させていただきました。

9月16日（木）から24日（木）まで、つくばみらい総合体育館の横に仮設ﾃﾝﾄを設営し毎日数名の鍼灸師が対応しました。

常総市からの避難者約400名が対象となり、私は17日と18日に参加させていただきました。

体育館の床に毛布（ある避難所ではｴｱﾏｯﾄも使用）を敷いて寝ている、座っている高齢者が多いためか筋緊張が強く不具合を起こしている方が目立ちました。

また、夜は被災後の後片付けから戻った方々に対応して鍼刺激を提供しました。

生物心理社会的疼痛症候群（不良な姿勢ｽﾄﾚｽと精神的ｽﾄﾚｽにより筋緊張が起こり疼痛を起こす＝腰痛の

原因）の方々が多いと感じました。

全国での調査によると鍼灸を体験された方（受療率）は5%に届かないと発表されていますが、避難所でも同様で体験したことがある方は僅かでした。

しかし、福島の時と同じように多くの被災者に喜ばれたと同時に鍼刺激のﾌｧﾝになったという方もいました。

避難所にはﾌﾞﾗｼﾞﾙの方が50名ほどいましたが、興味を示す方が多かったです。

災害はいつどこに発生するか誰もわかりませんが、各自準備はしておきたいものです。また、被災後はお互いに助け合うことが大切なことだと感じました。
（今月ご紹介した本・人は愛することで健康になれるを実感です）

次回は9月にお知らせした「統合医療としての鍼刺激」の続きです。